

# 近代都市のジェンダー秩序とその現代の変容

## ——『ガールズ・アーバン・スタディーズ』への注釈——

Gender Order in Modern Japanese Cities and Its Contemporary transformations:  
Annotations for *Girls Urban Studies*

田 中 大 介  
TANAKA Daisuke

【要約】近年、ジェンダーと都市に関する社会学的・地理学的な研究が蓄積されている。本論では、ジェンダーと都市に関する研究をレビューしながら、日本の近代都市における「女性と都市」の関係とその現代的な変容の構図を考察する。まず、近代的な産業都市においては、男性は都心地域に集中する「職場」という生産の領域（第二空間）に、女性は郊外地域に広がる「家庭」などの再生産の領域（第一空間）に住み分けられる傾向にあった。また、そのあいだにある繁華街や交通（第三空間）は、女性にとって消費を楽しむ舞台ともなったが、性暴力にさらされるリスクの空間でもあった。しかし、近年の女性の社会進出にともない、住宅や職場の都心回帰や都心のショッピングモール化が進んでいる。また、女性専用車両の導入、あるいはモバイルメディアの普及などによって、女性の過ごしやすい都市空間が整備されはじめている。そこでこの「都市のジェンダーフィクション」とよばれる変化の意義と課題を、〈ガールズ・アーバニズム〉というキーワードを通して考えたい。

### 1. はじめに

女性たちにとって都市とはどのような場所なのか。たとえば女子大学生が、朝、母親の作った朝食を食べて大学やアルバイトに行く場面を考えてみよう。母親はすでにパートや地域の集まりに行っているかもしれない。自分の就職活動について家族と相談したいが、都心の職場に朝早く出勤し、帰りも遅い父親とは最近、話をする機会が減っている。就職後、自宅から通うべきか。あるいは一人暮らしをするにしても、そのリスクやコストなど考えるべきことは多い。

多くの異論があるはずだが、このような記述が「ステレオタイプだ」、「古臭い」と判断できるとすれば、その程度にはこうした都市生活が——反発するにせよ、共感するにせよ——「ありそうなもの」であったということでもある。

後ほど述べるように、都市は女性たちの生き方に特定の「枠組み」や「振り幅」を設定することがある。もちろん、女性はずねに自分が「女性であること」を意識して都市を生きているわけではない。いつもそのようなことを考えているとすれば、息苦しささえ感じるだろう。一方で都市は、「女性らしさ／男性らしさ」というジェンダーの秩序に沿って構築されている部分がある。つまり都市は、女性（やその他の性）に対して生き方のパターンやスケールを与える環境になりえる。都市において、どこに住むのか、どこで働くのか、どこで遊ぶのか、どこを通るのか、それらの場において誰と、どのようにふるまうのか——既成の都市のパターンとスケールのなか

で、「女性」として選択しなければならない（あるいは選択できない）場面がある。それはときに女性（やその他の性）は「こういう存在だ／こうふるまうものだ／ここにいてほしいだ」というステレオタイプに転化する。もちろん、それらを解除し、再設定することで新しい文化を生み出すことがあるのも都市の特徴だろう。社会学の言葉でいいかえるなら、都市は女性の「ライフチャンス」(Dahrendorf1979=1987)（社会構造のなかで人びとに与えられている選択や結束）を限定したり、開放したりする時間や空間として広がっている。

「女性」と括られる存在が多様である以上、都市の現れ方もさまざまだろう。「女性」そのもの、あるいは「男性」や「LGBTQ」も含めて「性のありかた」は多様なものでありえる。ここでいう「女性」は、生物学的な性別も含めて、「女性」や「女子」として自己を認識したり、他者から認識されたりするなかで、そのような存在として振る舞う人びと——いわゆる「ジェンダー」としての女性——を広く指す。当然のことながら、そのようなカテゴリーで括られる人びとのあいだには多様なグラデーションがある。本論で扱いたいのは、そのような「女性」というカテゴリーのなかでゆらぎながら、それと対峙し、都市を生きていく人びとである。

たとえば、近年では「〇〇女子」や「〇〇ガール」とよばれる存在が注目されてきた。これらは、主に都市的な場における女性の存在や活動が——かつては男性が中心であった領域に——広がっていく様子をポジティブに表現している。たとえば、「女子」現象の擁護者ともいべき米澤泉は、ファッション誌の分析をもとにしながら以下のように述べる。「装いの力としての『女子力』は、基本的に男性に向けられているものではない。むしろ『女子』として生きていくための原動力となっているものである。装いの力によって、女は『女子』となる。妻や母といった女性的役割、良妻賢母思想を軽やかに脱ぎ捨てるファッション誌の『女子力』はもっと評価されるべきであろう」（米澤 2014：191）。そして、「ファッションという手段によって、『常識』や年齢を超えること。良妻賢母規範までも軽やかにすり抜けようとする装いの力としてのファッション誌の『女子力』は、今後も健在であろう」（同上：194）と予測する。

一方で、そうした表現が男性に用いられることはあまりない。「〇〇男子」や「〇〇ボーイ」もないわけではないが相対的に少なく、「男子力」といった言葉は普及していない。その意味で、「〇〇女子」という表現は、女性たちを「女性らしさ」に囲い込み、「若さ」に縛るものになりかねない。とりわけ、「女子力」という言葉は「女性らしさ」の競争や格差を煽るハイパー・メリトクラシー（過剰な能力主義）であり、「新たな良妻賢母規範」ではないかという批判もある（菊池 2019：125）。

「女子」や「ガール」という表現は、人びとを旧来的な「女性らしさ」に拘束するのか、そこから解放するのかについては意見が分かれる。ただし、都市を生きる女性たちは「女子」や「ガール」というカテゴリーを通して、変化しつつあるみずからのセクシュアリティやジェンダーとどう向き合うべきかを問い返しているとはいえるだろう。だとすれば、都市のなかで「女性をする楽しさ」や「女性をさせられる苦しさ」を考えることで、「都市とはなにか」を新たな視点から問えるのではないか。

現代の女性たちは、家族を作り、住宅に住み、街路に出て、交通機関を利用し、職場で働き、商業施設で買い、娯楽施設で遊び、飲食店で食べ、友人・恋人と憩い、趣味を楽しんでいる。つまり、都市には「女性たちが生きる」領域が——別の性の領域と重なり／絡まり合いながら——広がっている。近年、こうした都市とジェンダーに関する研究が増加している。すでに英語圏で

は、Helen Jarvis et al. 2009, *Cities and Gender*などの教科書的な書籍も出版されており、日本でもレスリー・カーン『フェミニスト・シティ』が翻訳された。2023年には筆者も編者のひとりとして『ガールズ・アーバン・スタディーズ』（以下、『GUS』と表記）を出版している。本論では、上記の研究成果の理論的・現代的な意味を「都市にとって女性とはなにか」、そして「女性にとって都市とはなにか」という問いを通して考えたい<sup>1)</sup>。

## 2. 都市にとって女性とはなにか

### 2.1 アーバニズムと女性——異質性と多様性をめぐって——

「都市とはなにか」という問いに対する答え——都市の定義は、研究分野ごとにさまざまにある。たとえば、シカゴ学派都市社会学の代表的論者のひとり、ルイス・ワースは「生活様式としてのアーバニズム」（1938）という論文のなかで、以下のような都市の定義を提示する。

都市とは、異質な諸個人による、相対的に大きく、密度の高い、永続的な居住地である  
と社会学的に定義できるだろう。For sociological purposes a city may be defined as a relatively large, dense, and permanent settlement of socially heterogenous individuals. (Wirth 1938:8)

この定義のポイントは、人口量 (Large numbers)、密度 (Density)、異質性 (Heterogeneity) である。つまり、たくさんの人びとが集まっていて、それが一定の空間にひしめきあい、そこにいる人びとの属性がさまざまであれば、都市である、というわけだ。そして、このように定義された都市は「アーバニズム」とよばれる都市に特有の生活の仕方 (way of life) を生み出すとされる。

では、「アーバニズム」、つまり都市生活の特徴とはどのようなものなのか。ワースは多くの特徴を挙げている。都市では人間関係が表面的・一時的・匿名的なものになりやすく、職業の分業化・専門化や集団・空間の住み分けも進んでいく。ただし、異質な個人が増えていくと、社会の流動性、不安定さ、危険性も増す傾向にある。そして、そうであるがゆえに、人びとは大衆 (mass) として均一化され、組織的にコントロールされたものになる、ともいう。ワースの「アーバニズム」論は、都市化によってコミュニティが壊され、社会が不安定になると説く「社会解体説」と位置付けられ、多くの批判や検証がなされてきた (松本 2021)。

シカゴ学派の都市社会学が問題としていたのは、どちらかといえば人種・職業・階級などの「異質性」 (Heterogeneity) だろう。それは移民や移住者が大量に流入し、急激な都市化が進むことによって、深刻な社会問題に直面していた当時のシカゴの状況を反映している。そして、そうした「異質性」の高まりが、社会の解体につながるかもしれないことも危惧された。

一方、21世紀に入って注目されているのは、そうした「異質性」をふくめた「多様性」 (Diversity) というキーワードだろう。性別、人種・民族、国籍、宗教、年齢の違いに配慮した政策や制度を指すことが多いが、現在ではパーソナリティ、習慣、趣味、能力などさまざまな属性の違いも含めることもある。もともとは公民権運動が活発化した1960年代のアメリカで、人種・民族的などのマイノリティや女性の雇用機会均等のための政策や制度が現れたことに端を発している。さらに1980年代以降、そうした多様な人びとの違いを能力として生かす組織運営として「Diversity」を重視する視点が現れ、それが企業の収益化や効率化のエンジンと考えられるようになった (谷

口2008:77)。日本社会では、2000年代以降に政策的に使われるようになる「ダイバーシティ」だが、とくに「女性の活躍」に焦点が当たること多い（経済産業省2018「ダイバーシティ経営の推進」）。現在、「都市ランキング」とよばれる調査がさまざまな機関から発表されているが、世界の都市を評価する指標のひとつとして女性の社会進出がどれだけ進んでいるかも含まれている。

都市の特徴のひとつである「いろいろな人が集まっていること」は、社会解体をもたらしかねない「異質性」なのか、それともその共存・共生を実現する「多様性」なのか。この論点についてはすぐに結論がでない。ただし、たとえば2000年代以降の「創造都市」論（Florida2008 = 2009）などでは都市の自由度や開放性が——「異質性」がもたらすリスクよりも——重要視されており、資本主義的な都市の「多様性」は成長のエンジンとみなされている。したがって、「女性」もまた高度な労働主体のひとつとして見込まれているといえるだろう。

現代社会の女性は、「異質性」の高い都市に脅かされやすくもあり、「多様性」を目指す現代社会において自由を獲得しつつあるようにもみえる。都市における「異質性と多様性」の関係は一筋縄ではないが、女性はそのジレンマやバランスにひときわセンシティブであらざるをえない。そう考えると「都市とはどのような場所なのか」を考えるうえで女性の視点が欠けていたことは、都市の理解に大きな盲点を作っていたといえるだろう。実際、都市生活の権利が性別ごとに異なったかたちで身体化されていることをずっと見逃してきたことが都市の理解に限界をもたらしている、という批判もある（Beebejaun 2017）。そこで本論では、女性にとっての都市生活の特徴を考えつつ、「ガールズ・アーバニズム」ともよべる都市の在り方を模索したい。

## 2.2 都市の私的空間と女性——住宅・地域のなかの女性——

都市は古代文明と共に現れ、世界各地でさまざまなかたちをとって存在している。なかでも先進諸国に現れた近代都市の多くは、王様を戴く王権都市や神様を祀る宗教都市、あるいは中小の商工業者が集まる商業都市とは異なり、産業や資本が集中する都市となっている。

産業化した社会では、多くの人びとが多様な商品・サービスを「生産」する仕事をし、その売上・賃金で、流通する多様な商品・サービスを「消費」して生活をする。ただし、都市に来る人びとが増えていけば、税金などによって国家・自治体に集められた財を再分配して、産業や生活に関わる都市インフラ——土地、交通、通信、住宅、学校、病院、公園、河川、エネルギー施設、上下水道など——を整備しなければならない。また、このような都市インフラの開発自体が多様な産業や巨大な資本を作りだし、さらに都市空間が更新されることもある。このような産業を拡大する資本主義下の都市は「成長マシン」（Molotch1976 = 2012）ともよばれる。また、生産を支えるハード・アーキテクチャの整備だけでなく、消費を促すソフト・コンテンツが充実していることも現代都市の大きな魅力のひとつだろう。ファッション、ツーリズム、テーマパーク、博物館・美術館、音楽・映画・テレビなどの商業・文化・メディアに関わる施設が集積した都市は、「エンターテインメントマシン」（Clark2011）としての役割ももっている。

このように現代都市は、ハード・ソフト両面において、「生産と消費」を拡大し、経済を成長させるマシンとなっている。逆にいえば、都市に生きる人びとはそのマシンの部品になることで都市を駆動している。では、このような産業と資本が集中する都市において、女性はどうな役割や意味をもっていたのか。

これまでの都市論や都市社会学において女性の視点が弱かったことはしばしば指摘されてきた。ただし、多くはないものの確実に存在しており、ジェンダーやフェミニズムを重視した地理学や社会学は、住宅や家庭、その近隣を中心とした研究を蓄積している（若林ほか 2002、油井ほか 2004、油井 2012）。というのも、産業都市においては「男性は仕事、女性は家事・育児・介護」という「性別役割分業」が強く働いており、住居や地域が「女性の居場所」となりがちであったためである。その際、男性の労働者が中心となる「生産の空間」に対して、女性の居場所は「再生産の空間」であるとされる。

女性は、再生産労働を中心的に担っているがゆえに、再生産空間と密接にかかわり合ってきた。（中略）…都市空間における再生産空間は三重になっていると考えられる。すなわち、①社会生活のための諸活動を含む生活が営まれる領域（近隣住区・地域）、②家事・育児が行われる世帯を単位とする領域（住宅）、そして③住宅内で家事等の行われる台所など、世帯構成員の関係による構成される領域（部屋）である（影山 2004：7-8）。

なぜ「再生産の空間」とよばれるのか。それは住宅・地域が、労働の疲れを癒し、新しい労働者を生み、育てることで、人びとを労働者として「生産の空間」にふたたび送り出す空間とされるからである。女性は、仕事をする男性を家事等で支え、子どもが男の子なら夫・父のような社会人として、女の子なら自分のような家庭人として送り出す——すなわち「再生産」の役割をもたされてきた。

たとえば、現代社会の「女子/ガール」の起源のひとつに「少女」というカテゴリーがある。近代日本では、明治期に女学校が設置されるプロセスで、大人でも子どもでもない「少女」という期間が形成された。夫や子どもを支える「妻」や「母」になるための準備期間である「少女」は、愛が深く（愛情規範）、清らかで（純潔規範）、美しい（美的規範）——そうあるべき存在として教育されていく（渡部 2007）。現在では「ジェンダー（秩序）」とよばれる「女性らしさ／男性らしさ」をめぐる心理的・社会的・文化的な規範（「女性／男性」ならこうあるべきという考え方）が歴史的に形作られ、「性別役割分業」へと結実していったことになる。

一方、近代社会において都市化が進むと、「仕事のための職場」と「家事・育児・介護のための家庭」は空間的に離れていき、機能的に分けられていく。その結果、通勤通学という長距離・長時間移動がおこなわれるようになる。社会学者の磯村英一は、家庭を「第一空間」、職場を「第二空間」、そしてその中間領域にある交通や繁華街を「第三空間」と呼んでいる（磯村 1968）。

自営業的な農林水産業や商工業であれば、職場と住宅が近く、同じ空間にあることも多い。近代以前の規模の大きくない集落・村落の多くがそうした生活スタイルであった。しかし、人口が増え、工場や企業に勤める人が多くなり、市街地や居住地が拡大する。つまり都市化・郊外化するなかで、住宅と職場、すなわち第一空間と第二空間が離れて「職住分離」が進み、そのあいだにある第三空間も広がっていく。磯村は、第一空間・第二空間・第三空間のあいだが空間的に広がり、機能的に分かれていくことを都市的生活ととらえている。

「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が形成され、男性は「生産の空間」・「第二空間」を、女性は「再生産の空間」・「第一空間」を居場所にする。女性は「生産の空間」・「第二空間」へのア



クセスが時間的・空間的に困難になり、就業や仕事から遠ざかる。逆に男性は家庭や地域にあまり関わらなくなる。こうして都市における男性と女性の住み分けが進む。このとき、都市は女性を「妻」や「母」として住宅地や郊外地域に縛り付ける「あしかせ」になるだろう。しかも女性は、不安定な雇用状況に置かれ、家族の健康問題を担う傾向にもある。そのため、地域共同体に頼りにくい都市社会の女性は、将来にわたる経済的・社会的不安をとくに強く感じることになるだろう。

ただし、都市生活のなかで女性が家庭に閉じ込められていただけかという点、そうではない。女性は地域活動の主要な担い手にもなってきた(渋谷 1986,1996)。都市は、都市を生きる女性たちの人生や生活を「型」にはめることもあれば、問題解決や将来展望の「枠組み」(矢澤 1993: 6)になることもある。

女性たちは、私的な家族の小さな殻から抜け出て、開かれた地域での生活者同士の連帯(仲間づくり)による問題解決を志向し、具体的な活動を積み重ねてきた。女性たちは、もはや家庭生活の私的レベルでは解決困難な多くの問題(健康、保育、教育、介護、福祉、環境など)を、ときには既存の住民組織に変更を加えながら、地域での自発的共同性の創出と媒介として解決していこうと動き出した(矢澤 1993: 11)。

高度経済成長期に「会社人間・仕事人間」と揶揄された男性たちが職場(「生産の空間」)に長時間いる以上、女性たちが地域生活の課題に取り組まざるをえない。ただし、2000年代以降、そのような男性たちが大量に定年退職し、彼らにとって眠る・休む場所にすぎなかった郊外地域・地域社会に戻ってくる。しかし、彼らがふたたび地域社会で社会関係を作るときに重要な媒介者となるのは、現状ではやはり女性住民とされる(関村 2018: 192)。

ただし、女性の就業率が相対的に低く、結婚・出産後の離職率が高かったとはいえ、働く女性たちは一定数存在した。また、近年では女性の社会進出が進み、結婚・出産後に働く女性も増えており、男性と女性の既成の住み分けは変化するだろう。家庭・地域を離れて、職場・繁華街へ移動するようになれば、街路・道路・公共交通を頻繁に利用することにもなる。

女性は「母」や「妻」としてだけ生きているわけではない。ときに労働者として、消費者として、児童・生徒・学生として、通行人・乗客・運転手として、趣味人・愛好家として、友人・恋人として、そしてまた「誰でもない人」=群衆のひとりとして都市を生きている。だとすれば、女性たちは都市の、「第二空間」・「生産の空間」、「第三空間」・「消費と交通の空間」をどのように生き、どのような居場所を形作っているのか。次節では、「第一空間」という私的領域以外の都市空間と女性の関係を考えたい。

## 2.3 都市の公的空間と女性

### 2.3.1 「過-上演」の舞台——「女性」という自由と呪縛——

日本の社会学的な都市論の代表作のひとつに、吉見俊哉の『都市のドラマトゥルギー』がある。同書は、都市の盛り場・繁華街を、人びとがそこにふさわしい装いやふるまいを「上演」する一種の「舞台」としてとらえる視点——「上演論的アプローチ」を提示している。そして、浅草・銀座・

新宿・渋谷という東京の代表的な盛り場の「舞台性」や「上演性」の特徴と変化を分析する。ただし、そうした「舞台性」や「上演性」は男性と女性にとって同じ意味をもっているわけではない。では、女性にとって都市が「舞台」であり、都市の人びとの装いやふるまいが「上演」であるとはどういう意味だろうか。

たとえば、2004年に公開された『下妻物語』（原作は嶽本野ばらによる2002年の小説）という作品がわかりやすい。主人公のひとり、ロリータ・ファッションを愛する高校生・竜ヶ崎桃子は、茨城県の下妻市に住む。しかし、そこは田んぼのあいだを牛が通るような田舎であるため、彼女のファッションは浮いている。理解してくれる人もいない。一方、いきつけのアパレル・ショップのある東京の代官山にでかければ、同じ趣味の人とともに自分のファッションを楽しむことができた。

人間より動物が多いような場所では、ファッションを誰が見ているわけでもない。見ていたとしても、その価値をわかってくれるとは限らない。しかし、都市であれば、同じ趣味・嗜好の人に出会える可能性が高まる。都会にふさわしいファッションが求められるため、おしゃれをしていないと居心地の悪さを感じることもさえるだろう。このようにして都市は、お互いに見たり、見られたりしながら、ファッション性が高まる「舞台」になる。

しかも、美しく装うことが「女性らしさ」の重要な部分とされているとすれば、女性は男性よりもコスメやファッションに意識的にならざるをえない。そのことは、女性が化粧なしで街に出かけにくいことを想像してみれば良い。また、ファッションビルなどの商業施設における女性向けのフロアやテナントの多さをみても明らかだろう。近代の女性が「消費者」として主体化していく様子を描くアン・フリードバーグは以下のように述べる。「デパートは力を与えられた女性遊歩者の視線のための保護区を提供した。購買力を授かり、女性遊歩者は消費の呼びかけの標的となった。広告と消費文化によって、女性遊歩者のための新しい欲望が生み出された」(Friedberg 1993 = 2008: 47)。消費を楽しむ女性にとっての都市は、男性以上に装いや振舞いに意識的になり、過剰な演技を求められるような、いわば「過-上演」の舞台になる。

『下妻物語』の桃子は、自分が好きなファッションを追求して身につけた刺繍の技術によって、アパレル・ショップで働くチャンスを得た。それは、たとえば地方から大学に進学して、大企業に就職し、都市にある本社でキャリアの階段を上っていくような、かつての「男性」的なキャリアとは異なっている。女性たちには、都市に至るわかりやすい一本道のような階段は用意されていなかった。結婚・離婚、出産・育児、介護などを経て、正規雇用・非正規雇用、フルタイム・パートタイム、多様な職種などを行きつ戻りつする女性たちのライフコースはより複雑である。「再生産の空間」や「補助的な労働」を担った女性たちは、「生産の空間」という階段を下や脇から支える立場にあった。そのため、生産者として自立するためには、桃子のように独自にそのあい路を見出していく必要があったのである。

多数の異質な人びとが集まる都市は、同じ趣味・嗜好をもつ人と出会う可能性が高まる。村落であれば眉をひそめられる装いや鬘髻をかうふるまいが許容されることもあるだろう。気の合う友人・恋人を得る機会もあるかもしれない。だからこそ、ファッションという「美的なもの」へのこだわりが、桃子の将来や都市の自由を切り開いた。このような都市の自由さや選択肢の多さは、都市社会学では「都市の下位文化理論」として論じられ、ワースの「社会解体説」に対する有

力な批判とされてきた(Fischer1975 = 2012,1984 = 1996)。「多様性」の高い大都市は、女性にとってより将来の可能性＝ライフチャンスを広げられる場所といえるだろう。

その一方で、女性が都市や地方で就業するための選択肢や関係性は、特殊な分野に限定されてもいる。『下妻物語』原作当時の製造業全体における女性比率は中小企業が42.5%、大企業が22.9%だが、衣服・その他の繊維製品製造業は73.6%であり、突出して高いことがわかる。また、卸売り企業や小売企業においても繊維衣服の女性比率が高い状況だった。飲食企業の女性比率も60%以上を越えている(『平成10年商工業実態基本調査報告書』通商産業省)。現在の産業全体のなかでは、女性比率の高い業界は「医療・福祉」(75.5%)、「宿泊業・飲食サービス業」(61.6%)、「生活関連サービス業・娯楽業」(58.7%)、「教育・学習支援業」(57.5%)、「金融業・保険業」(54.8%)等である(『労働力調査 令和2年版』)。

美容・ファッションが追求する「美しさ」だけではない。上記の職種には、「再生産の空間」(家庭や地域)において行われてきた家事・育児・介護(いわゆるケア労働)など——裁縫も含まれる——で求められる「愛情」のイメージが含まれている。女性の就労の選択もまた「女性らしさ」というジェンダー役割に従っている部分がある。そのことは、都市において女性が「女性らしさ」を生かすことができているともいえるが、「消費と再生産」(娯楽や家庭)に近い領域に女性の労働が偏っており、それ以外の経路が選びにくいともいえる。もちろん、女性が上記のようなタイプとは異なる——たとえば男性の多い——職場で働くこともあるが、そうした職場特有の女性の困難もあるだろう。いずれにしても女性の労働において「美」や「愛情」が求められるならば、職場もまた「女性らしさ」をめぐる「上演」の舞台となる。

では、「女性らしさ」が過度に求められない職場を都市に求めるとすればどうだろうか。2021年の女子の大学進学率は、東京で74.1%と突出する一方で、10県が30%にとどまっている。都市よりも地方の進学率は低く、男性よりも女性の進学率が低い(共同通信2021.2.13)。そのため、「地域と性別による二重の格差」が指摘されており、地方の女性がいわゆるホワイトカラーの職業を望むことの困難さを物語っている。

この点に関連して、鳥トマトの「東京最低最悪最高」(『週刊ビッグコミックスピリッツ』2023年9月11日)という短編漫画は、地方にあまりない職業を女性が望むことのアウトサイダー性を描いている。共同通信の記事が指摘するように、地方の女子の進学先としては看護、医療、保育系の短大や専門学校が受け皿となっている。一方、成績優秀な女性や都会的な職業を望む女性は、地方を離れた人や地方に帰ってこない人、あるいは変わった人とみなされ、地元にいづらくなっていく。そのため、高度成長期にあったような大都市への強いあこがれがなくとも、一部の女性たちは「人が多く、家は狭く、道も汚く、物価は高い、最悪の東京」へと押し出される。だが、結果としてそこで得られた自由は「最高」でもある。

### 2.3.2 「反－上演」の場所 ——異質性と暴力性——

このように都市は、「女性」としての自由を楽しむ「舞台」となる一方で、「女性」にふさわしいふるまいが強いられる「舞台」になることもある。では、そこでは、誰が見て、誰が見られるのか、誰が触れ、誰が触れられるのだろうか。地理学者のジリアン・ローズは、ローラ・マルヴィ「視覚的快楽と物語映画」を参照しつつ、「男性が見る主体／女性が見られる客体」となる傾向を指摘



している。ただし女性は、いつも男性が見たいように見られるわけではない。それを拒んだり、逸らしたりしながら、みずから見返すこともある (Rose1995 = 2002)。

女性の立場になって考えるとどうだろうか。たとえば日本の都市では、通行人に声をかけてくるキャッチやナンパなどの存在がよく知られている。多くの場合、男性が女性を値踏みするようにながめ、声をかけてくる。そのぶしつけさに驚いたり、しつこくつきまとわれて辟易した経験を持つ女性は少なくない。痴漢などに触られることがあれば、恐怖の体験でしかないだろう。そのため、そうしたリスクを避けるテクニックを身につけざるをえないこともある。もちろん、そうしたことに悩まされるのは女性にかぎらないが、いきなり「舞台」にあげられ「女性」を「上演」させられる立場からみれば、吉見が「上演論的アプローチ」といつてしまえるのは都市の「暴力性」に対してナイーブといえなくもない。

とくに女性が都市空間を生きるうえで感じる恐怖や不安は、男性よりも際立っている。そのため女性たちは、繁華街や公共交通を移動する際に、時間帯やルートを注意深く調整し、人との距離や視線を意識するようになる (Pain1997 = 1999)。

もちろん、こうした海外の事例を日本にそのまま適用することはできないだろう。日本のように夜道を女性が一人で歩ける都市は多くはないし、セキュリティに対する意識もかなり異なる。たとえば、2015年から2年ごとにザ・エコノミスト・インテリジェンス・ユニット (The Economist Intelligence Unit (EIU)) が作成している「Safe Cities Index (安全な都市指標)」がある。2021年の報告書の東京は5位だったが、それまでの東京は3連続首位であり、大阪も常に上位に位置している。2021年においても犯罪発生率に関するスコアも1位である。

ただし、こうした客観的な治安状況に比べると日本における体感治安は良くはない。そして、そうした主観的な警戒感に沿って都市における女性の行為も形成されている。たとえば、シングル女性の居住地選択の調査によれば、「じっさい、インタビューでも夜道の安全性に配慮して、駅から10分以内を希望する人が大半」(油井ほか2012:79)であり、「地域や住宅のセキュリティの問題に対して、女性は男性以上に配慮している」(同上:90)という。東京区部では、30代未満の女性未婚者率は山手線西部で高く、東部で低い比率となり、この居住地選択の偏りは、女性が住宅市場と治安状況の両者を考慮にいれて居住地を選択しているためとされる(油井2012:103)。シングル女性の居住地選択が、都心との通勤時間が短い駅の近くで、とりわけ防犯と治安を重視した場所を志向することは2000年代以降、幾度も指摘されている(若林ほか2002, 油井ほか2004)。

私的領域に押し込まれたドメスティック・バイオレンスから、公的領域でさらされる多様なハラスメントまで——女性たちは住宅、地域、繁華街、学校、職場などの空間に潜む暴力性を、多かれ少なかれ気にしながら都市を往来せざるをえない。このように、女性が望まぬかたちでセクシュアルな対象として見られ、触れられるとき、都市は性暴力の空間として現れる。とりわけ若年女性は、いずれ妻や母として家庭に入るために〈純潔〉を求められながら、都会の公的空間では「性的なまなざし」にさらされるというジレンマのなかにいる。セクシュアリティが商品として売買される空間として、遊郭、花街、風俗街、歓楽街が存在していることも、都市の重要な側面だろう。

女性にとっての都市が「恐怖と不安の空間」になりうる以上、「見る／見られる」、「触れる／触

れられる」ことをできるだけ避け、隠す技法・知恵が求められる——いわば「反-上演論」的なコミュニケーションもまた、女性が都市を生きるうえで欠かせない。

都市の「多様性」の高さは、私たちに好きな格好や多様な趣味を楽しむことを許容し、新たな出会いをもたらすこともある。そして、娯楽の集積する都市へと一緒にでかけていけば、そこは特別な関係であることを確認し、親密な関係を育むためのキラキラとした「過-上演」の舞台にもなる。ジェンダー規範を通して「女性をすること」の楽しさを加速し、女性としての「ライフチャンス」を拡大することもあるだろう。その一方で、「女性であること」を強いられるため、見知らぬ人の多さに不安になり、不審者に苦しむこともある。都市の「異質性」に不安や恐怖を感じる機会が多い女性にとっては、他者の視線を避けたり、隠れたりする「反-上演」のコミュニケーションが必要になる。

このように、都市を生きる女性たちの「過-上演／反-上演」——「見たい／見たくない」、「見られたい／見られたくない」、「触れたい／触れたくない」、「触れられたい／触れられたくない」——の振り幅は大きい。「女性」を楽しむ舞台でありながら、それと同時に「女性」を意識せずにいられる場所であることはいかにして可能か——そのような「多様性と異質性」のジレンマを都市の女性は生きている。

ここまで「都市にとって女性とはなにか」を考えることを通して分析した構図を図式化するならば以下のとおりである(図1)。

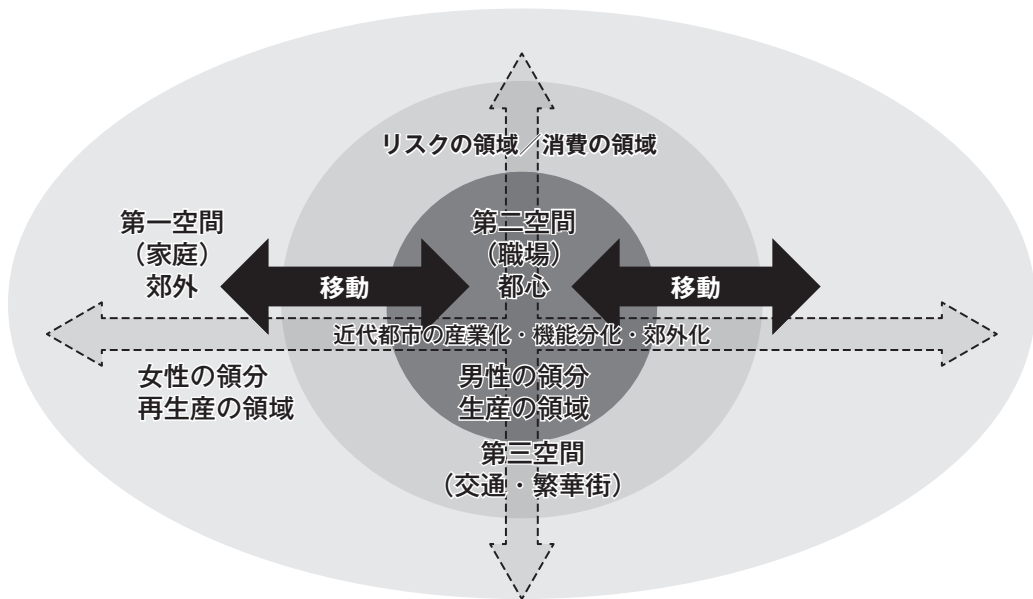


図1 近代都市における「男性／女性」の「領分(テリトリー)」

## 2.4 情報空間と女性

### 2.4.1 モバイルメディアと「映えの空間」

現代社会において、「上演の空間」となっているのは、都市空間だけではない。モバイルメディアやインターネットの発展・普及により、現代の若者にとってSNSを中心とする情報空間の重要度が増している。2017年に「インスタ映え」が「新語・流行語大賞」を受賞したが、とりわけ若い

世代の女性にとっては、写真や動画などのヴィジュアル・イメージに特化したSNSが注目されてきた。

総務省『令和3年度(2021年)情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査』によれば、Twitterが男性42.7%・女性41.8%、Facebookが男性32.4%・女性31.4%である一方、Instagram利用率は、男性35.3%・女性49.4%である。特に10代・20代女性の利用率は7割を超え、30代女性で7割近い利用率となっている。またInstagramに「スマートフォン・携帯電話から書き込む、投稿する」は男性10.9%、女性21.7%であり、女性のアクティブ・ユーザーが多いこともわかる。また、2019年の時点でのInstagramは、「都会の人ほど利用率が高い、都市派のSNSである」(天笠2019:32)とされ、「Instagramは、都会のほうの方が優れているもの=流行などに即した消費体験を伝えるのに適したメディアであると推察される」(同上)ともいう。このように、都会の若い女性ほどヴィジュアル・イメージを中心としたInstagramを利用する割合が高い。

1990年代半ば以降、「プリクラ」(プリント倶楽部)を用いる若い女性たちに広がったのが、見た目を加工する「盛り」とよばれるヴィジュアル・コミュニケーションである。「盛り」は、その後、モバイルメディアやインターネットなどのテクノロジーの進化とともにさらに展開している。「盛り」を研究する久保友香は、インターネット上での公開、デジタルカメラや画像処理による加工、つけまつけやカラーコンタクトなどによる成形を、それぞれ「ソーシャルステージ」、「セルフイーマシニング」、「プラスチックコスメ」と名付け、それらをあわせて「シンデレラテクノロジー」と呼んでいる(久保2019:40)。

このプロセスで「盛り」は、「インスタ(SNS)映えする／しない」という表現に置き換わっていった。そして、顔や全身だけではなく、「ロケーションを含む『シーン』全体」(同上:309)が重視され、「映えスポット」とよばれる非日常性を演出できる場所を求めるようになる。また、それらは「大人や男性はズバズカと近寄ることができない仕掛け」(同上:317)であるともいう。

さらにいえば、いつでもレンズを向け、簡単にシャッターを押せ、即座にネットにアップロードできるケータイ／スマホのカメラは、自己防衛のための「見張り／見守り」(角田2017)の手段ともなりうる。「見られる側」に押し込まれてきた女性たちだが、モバイルメディアの簡易性・記録性・拡散性の高さによって「見る側」の位置取りを確保できる。それは「盗撮」されるリスクにもなりうるが、それを見返すこともできるだろう。都市空間における「見る主体／見られる客体:男性／女性」という関係はモバイルメディアによって反転し、女性が「見る主体／見せる主体」、もっといえば「撮影・記録・伝達する主体」となることを可能にするのである。

「シンデレラテクノロジー」と名付けられているように、これらの「盛り」テクノロジーは「女子／ガール」であること・することの「増幅装置」であり、それ以外の存在の干渉を遠ざける「バリア」になるともいえる。それは多方向的なまなざしにさらされる街という「舞台」の女性視点からの再演ともいえなくもない。しかし、そこで撮影される都市空間は、カメラによって画角が限定された背景、また他者の存在をコントロールしやすい「スタジオ」に近い。

とりわけ情報空間においては、「現実以上」のフォトジェニックなイメージの演出が重視される。撮影の対象、加工の度合、発信の選択、公開の範囲などをさまざまに操作し、現実の事物を取捨選択して、イメージが形作られる。都市空間にある「きれいなもの」、「かわいいもの」などを探索し、それらを情報空間で発信する。あるいは情報空間において構築されたイメージを見て、それを実

際に見聞するために都市空間を訪れる——そうした現実空間と情報空間のフィードバックループを期待して、都市空間が書き換えられていくこともある。たとえば「映え」や「盛り」を求める人びとを集客するために、デザインを工夫したり、イベントを企画したりすることは珍しいことではない。そう考えると「映えスポット」とは、都市を「かわいく」していくことによって、「女子/ガール」的空間を拡張する仕掛けともいえるだろう。

## 2.4.2 テーマパーク化とジェンダーフィクション

もちろん、メディアを通して演出されたイメージ通りに都市空間のすべてが変化することはない。また、こうしたメディア化する都市のリアリティという視点は、それほど新しいものでもない。1980年代末頃から頻繁に論じられてきた「都市のディズニーランド化」や「テーマパーク化」といったテーマにつながる。

ディズニーランドは、主に映画というメディアで作られた記号とイメージを模造した人工的空間とされる。ディズニーの世界観に合わないものを排除し、外部を遮断することで、そこは自己完結的な空間となる。先の吉見俊哉は、ディズニーランドを消費化・情報化する現代社会の都市の「モデル」とであると指摘する(吉見 1996)。

たとえば、ディズニー社の用語では、想像上のイメージを巧みに制作・操作しながら実際の空間を作り変えることを「イメージ工学 (imageengineering) imagination + engineering」という。そして、エンタテインメント産業のソフト・コンテンツの手法を用いて、土木工学のようなハード・インフラを作り変えていく担い手は「イマニジア (imagineer)」と呼ばれている。このような「イメージ工学」を駆使しながら、消費・レジャーの空間を作り、収益を上げる「都市の商品化」はディズニーランドに限ったことではなく、現代社会のさまざまな領域で見ることができる。

そこで、日常をあらためてよく見わたしてみる。すると、舞浜の東京ディズニーリゾートに充満するような非日常性は、その外部であるはずのわたしたちの日常の随所にも発見できることにきづかされるだろう。…たとえばコストコやイケア、三井アウトレットパークやイオンモール、といった巨大な複合商業施設では、ディズニーランド的なお祭り騒ぎの高揚感そのものとまではいかないにせよ、それを幾分か希釈し劣化させたような、しかし確実に同種の「小さな非日常性」が演出されている。規模や質の総意をさしあたり問わなければ、コンビニエンスストアやスーパーマーケット、レストランやオフィスビルはもとより、日帰り温泉施設から高速道路のサービスエリア、バラエティ番組からインターネット上の種々のサイトやサービスにいたるあらゆる消費の現場において、やはりディズニーランドのそれにつうずるようなさまざまな日常を見出すことができる。

メディア化したポストモダンな情報消費社会では、日常のあらゆる営みにイメージと消費とが深く絡みあう。そこに根を張りながら、ディズニーランド的な非日常性は、日常世界の全域に広く浸透し、繁茂しているようだ(長谷川 2014: 3)。

都市のテーマパーク化は、多くの批判を受けてきた。土地の歴史や風土に無関連なイメージのパッチワークの空間でしかない。消費を煽る資本主義のために作られた紛いものの空間である。

あるいは、貧困・差別などを排除しており、管理・監視された空間である…等。だが、そのようにハイパーリアルに維持される〈安全・快適〉や〈かわいい〉の空間が、「女性や子ども」を守り、「女子であること・すること」を維持するためのものだとすればどうだろうか。

たとえば、近年のショッピングモールもテーマパークのような空間に近い。内装は充実しているが、外観への関心が薄く、施設の外側と切り離された自己完結的空間となっている。また、どこでも概ね同じような空間や構成であると予測しやすい。そのためモールは、社会的弱者にやさしいバリアフリーの世界であり、「新しい公共性」につながると指摘されている（東・大山 2016）。

これらの変化は、フォーディズム型の産業都市からポストフォーディズム型の消費・情報都市への構造変容にも対応している。たとえば、ヴァンデンバーグによれば、肉体労働者が多く、男性の働き手を中心であった工業化時代の都市は、「男らしい」、「タフ」で「粗雑」なイメージであった。しかし、脱工業化が進み、情報・サービス産業が中心になると、「ソフト」で「繊細」な「女性らしい」——あるいは「LGBTQ」に融和的な——イメージの都市へと書き換えられていく（Van den Berg 2017：50）。

とくに情報・サービス産業においては、都市人口を維持し、高水準の教育をうけた人びとによって経済を活性化させることが求められる。そのため、ヨーロッパの都市では女性が安心して働き、子どもを生み、育てることができる都市を作ることが重要視されている。この「女性や子ども」にやさしいイメージを作る手法のひとつが都市の「イメージ工学」であり、そのイメージに沿って公共空間や商業施設の建設が促されていく。「女性と子ども」にやさしい都市計画は「ジェンダーフィケーション genderfication（ジェンダー平等に配慮した都市開発）」とも呼ばれる（同上：53）。日経Xウーマン『共働き子育てしやすい街 2022 総合編ベスト 50』などが公表されているように、人口減少・少子化、地域社会の空洞化にあえぐ現代日本の都市にとっても、重要な課題だろう。ただし、それは比較的裕福なミドルクラスのための消費・レジャーの空間であり、貧困層や特定の人種を排除しかねない「ジェントリフィケーション（都市の高級化）」にもなりうる。すなわち、「ジェントリファイアーとしての女性」という側面に注意をむける必要もあるだろう<sup>2)</sup>。

もちろん、すべてがディズニーランドのように高度に管理され、隅々まで行き届いた高級な空間ではない。いみじくも「シンデレラテクノロジー」と名付けられているように、SNSというステージにつながるモバイルメディアは、そうした不徹底な都市環境を女子的な世界に一時的に変換できるような、手のひらのうえの「インスタント・ディズニーランド」といえるだろう。

このように現代都市がアメニティ性やエンターテインメント性を高めていく「テーマパーク化」には二つの側面がある。一方では「かわいい」の残酷さや強欲さを批判する「反ディズニー化」の議論があり、その一方で「弱きもの」へのやさしさを称える「親ディズニー化」の議論がある。女性たちは、テーマパークやショッピングモールにおいてこそ安心・安全な消費・レジャーを楽しむことができると考えるべきなのか。あるいは、そうしたやさしい空間やかわいい世界に閉じ込められている（そしてそれとは「異質な存在」を排除している）と考えるべきなのか。

とりわけ日本の都市の「かわいい化」が他の社会よりも進んでいるとすれば、日本社会の女性はガールズ的な世界のなかで保護されているともいえるし、囲い込まれているともいえる。ほかにも、女子大学の多さ、女性専用車両の設置、レディースデイという制度等は日本社会に特有の女性と都市の関係を表している。これらは女性を守るバリアにもなれば、社会進出のハードルに



もなりうるだろう。日本的都市は、女性に対して「優しい（アファーマティブな）社会」なのか、あるいは「子ども扱い（パターナリズム）の社会」なのか。こうしたジレンマを越えてさらに考えるべきは、そのようなディズニー的なテーマパーク空間や女性専用の空間だけではない、女性と都市のありかたはどのようなものである。

### 3. 女性にとって都市とはなにか？

#### 3.1 ガールズ・アーバニズムに向けて

本論の最初に、現代都市は近代のジェンダー秩序に沿って形作られている部分があると述べた。そして、そのようにジェンダー化された都市が、いかにして女性たちの生き方の「枠組み」や「振り幅」を設定し、その行為や関係を左右しているかを考えてきた。逆にいえば、ジェンダー秩序が変化することによって、現代都市のありかたも変わっていく。

近年、社会学的な「アーバニズム」とは異なるかたちで、建築・都市計画などの領域で〈アーバニズム〉という言葉が流行している（中島 2021）。たとえば、「ニュー・アーバニズム」、「タクティカル・アーバニズム」、「ランドスケープ・アーバニズム」、「ソフト・アーバニズム」など、その他多数現れている。

先に示したように、20世紀の都市社会学が提示した「アーバニズム」は、産業化によって成長する都市が人びとの生活様式をどのように変えるのかを考えたものであった。そして、拡大都市における「アーバニズム」は、コミュニティ解体というネガティブな効果をもたらすとされ、その後多くの議論を呼んだ。

一方、建築・都市計画において提示された各種の〈アーバニズム〉は、20世紀末以降の新たな都市のあり方の模索といえるだろう。そこには、産業構造や人口構成が変化し、市街地が空洞化するなか、都市の賑わいをいかにして創出するかという試みもある。つまり現代の〈アーバニズム〉は、縮小都市のポジティブな活用の模索にもなっている。

このような流れのなかにあって、本論で考えてきたことは女性の立場からの新たな〈アーバニズム〉の模索といえる。それをここでは仮に「ガールズ・アーバニズム」とよんでみたい。例えば『GUS』という著作の「ガールズ」は、先行する『ガールズ・メディア・スタディーズ』を踏まえ、女子大学勤務の教員たちが主に女子大学生向けに編集するなかで採用されたものだ。その意味で「ジェンダー・アーバニズム」や「フェミニスト・アーバニズム」でももちろんかまわない。とはいえ、その主体をどのように表記するのかはシンボリックな意味をもつだろう。たとえば、第一波フェミニズムは「婦人」参政権の実現を掲げて公的領域への進出を目指した。第二派フェミニズムのひとつとされるウーマン・リブの運動は「女（たち）」を標榜して私的領域における抑圧を暴いてきた。こうした系譜をふまえ、「ガールズ」という表記を使う意味を以下のように考えることもできる。

冒頭で触れたように「女子力」という日本語は保守的な意味に解釈されやすい。しかしそれとは対照的に、「Girl Power」という英語は女性たちの自立の力強さや、ときに荒々しい自由さ、そしてそれらを表現するポピュラーカルチャーの広がりを意味している。実際、1990年代初頭にアメリカの女性パンクバンド「ビキニ・キル」がこの言葉を使い、「ライオット・ガール」とよばれる女性たちの文化運動・社会運動（第三波フェミニズム）に影響を与えたとされる（清水 2022：

32-41)。

一方、「女子」と「Girl」のあいだにあるカタカナ語としての「ガールズ」は、消費文化をけん引した「モガ(モダンガール)」、「ギャル」などの言葉の延長線上にあり、「おてんば」や「やんちゃ」な自由さを想起させる。また、「ガールズ」の若さにおいて名指されているのは、「妻」、「母」、そしてすべての「女性」が経由した、かつてそうであったはずの存在である。それは、まだ妻でも、母でも、労働者でもない、既存のライフステージやライフコース(あるいは「家父長制と資本制」(上野 1990 → 2009))以前の、他でもありうる／ありえたであろう可能的な存在を指している。こうしたことをふまえて、〈ガールズ・アーバニズム〉を、現代都市に複雑に編み込まれたジェンダーの秩序と経験、および未だ十分に現れていない女性と都市の多様な関係を見通すための言葉として考えたい。あるいは、日本的な都市環境において、保護されつつ、隔離されることで十分に言葉をもつことができなかったかもしれない「ガールズ」たちが都市の中心に向けて声を発するためのコンセプトでもある<sup>3)</sup>。

### 3.2 女性の都市化／都市の女性化

戦後日本の社会意識において最も大きな変化を遂げたもののひとつは、女性に関わる社会意識である。女性の教育は大学までという意識が高まり、家庭のみならず仕事を両立することが求められる。夫も家事をするのは当然という考え方も広がった(NHK放送文化研究所編 2015)。現代日本のジェンダー・ギャップ指数の低さは目を覆わんばかりだが、1986年の男女雇用機会均等法、1999年の男女共同参画社会基本法、2015年の女性活躍推進法の施行などによって女性の社会進出も広がりつつある。女性の労働者は、かつて「BG(ビジネスガール)」、「OL(オフィスレディ)」、「キャリアウーマン」などと表現され、男性が主流の労働市場のなかの周縁的存在として有徴化されてきた。しかし、近年では「ビジネスパーソン」という無徴化された表現が普及しており、現代都市における標準的な労働者として、女性は主体化されている。

こうした流れのなかで興味深いのは、同時期に東京を中心とする大都市の郊外化がひと段落し、都心回帰・再都市化の傾向が現れている点だろう。とくに都心三区で働く30～34歳の男性の割合が低下する一方、女性の割合は増加傾向が続き、「女性の職場の都心集中と男性の職場の郊外化」が指摘されている(中澤 2012: 163-164)。そのため、「男性・生産・都心／女性・再生産・郊外という、都市空間とジェンダー役割との関係についての一般的な理解とは逆の傾向」(同上: 164)が現れているという。とりわけシングル女性は都心居住の傾向がみられ、マンション購入の意欲が高い。女性にとっての都心居住・住宅購入は、みずからのライフスタイルを作り、楽しむためのものでもある(由井ほか 2012: 95)。その背景には、1990年代以降、ファミリー層に敬遠されがちな商業地の利用を図るデベロッパーの意図と金融機関の単身者融資の拡大がある。そして、それがシングル女性たちの更新料・敷金・礼金負担への不満、住居への要求水準の高まり、将来的な賃貸収入への期待の受け皿となった(油井 2004: 164-165)。女性のライフコースの多様化は、「下宿・寮→賃貸アパート→郊外庭付き一戸建て」という画一的な「住宅双六」を成立させるにくくする。その結果現れたのが、それぞれの仕事と生活によって選択される「ライフスタイル居住」なのである(中澤 2004)。

また、郊外地域で開発され、普及したショッピングモールが、2000年代以降、都心地域に進

出している。さらにJR系の駅再開発、あるいは各鉄道事業者による女性専用車両、防犯カメラの導入も進んだ。その結果、匿名的・流動的な他者のリスクにさらされやすい交通の空間が、管理された「安心・安全」な空間へと転換しつつある。これらのことは、『GUS』でも多角的に論じられている。

このように全体的な人口移動は低迷しているが、女性の都市への関与は相対的に高まっている。都市計画における「ジェンダーフィケーション」の進展を含めて、これからの〈アーバニズム〉を担う存在として女性の役割はますます重要になっているといえるだろう。20世紀の郊外化で「再生産」の空間に足止めされた女性たちが、21世紀の都市回帰のなかで都市の最前線へと徐々にせり出してきたといってもいいかもしれない(図2)。ただし、それは生産と再生産の二重負担を強いるものになりうる点に注意が必要だろう。

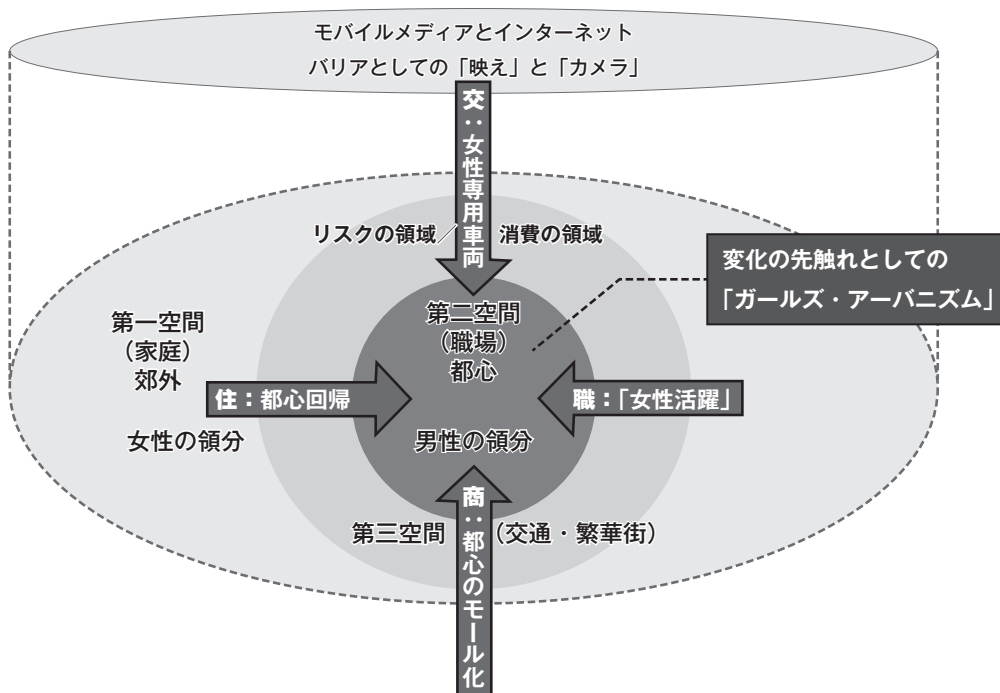


図2 現代都市における「男性と女性」の住み分けの変容

本論で「ガールズ・アーバニズム」とひとまず名付けたものは、「都市にとって女性とはなにか」、そして「女性にとって都市とはなにか」を考える分析的な視点である。ただし、そうした分析の先には、女性のライフチャンスを開き、新たなパターンやスケールの都市をつくる〈ガールズ・アーバニズム〉があらわれるのではないという期待も込められている。近年現れているジェンダーと都市に関連する著作は、そうした〈ガールズ・アーバニズム〉の萌芽や方途を垣間見せてくれている。

ただし、フェミニズムやジェンダー論にも複数の視点があり、都市に対する立場も多様だろう。男性と同等の都市へのアクセスとセキュリティを要求する、都市における女性特有の楽しさや苦しさを明らかにする、都市の「女性」そのものの多様性を追求していく——こうしたことが重なりあいながら、〈ガールズ・アーバニズム〉も模索されることになる。もちろん「ガールズ」以外

の年代、性別、階層、属性、およびその複合によるアーバン・スタディーズの展開を否定するものではない。むしろ、こうした重層的で、具体的な探求こそが、多様な人びとたちがよりよく共存できる都市とはどのようなものなのか、というより普遍的な問題へとつながっていくはずだ。

#### 参考文献

- 東浩紀・大山顕 2016『ショッピングモールから考える』幻冬舎
- 天笠邦一 2019『露出志向と覗き見志向』三浦展・天笠邦一『露出する女子、覗き見る女子』ちくま新書
- Beebejaun Yasminah, 2017 “Gender, urban space, and the right to everyday life”, *Journal of Urban Affairs*, 39:3, 323-334
- Clark, Terry Nichols ed. 2011. *The City as an Entertainment Machine*. Lexington Books
- Wirth, Louis, 1938, “Urbanism as a Way of Life”, *The American Journal of Sociology*, Vol. 44, No.1
- Dahrendorf, Ralf, 1979, *Lebenschancen. Anläufe zur sozialen und politischen Theorie*, Suhrkamp. (= 1987 吉田博司・田中康夫・加藤秀治郎 (1987)『新しい自由主義—ライフ・チャンス』学陽書房)
- Fischer, Claude S., 1975, “Toward a Subcultural Theory of Urbanism,” *American Journal of Sociology*, 80: 1319-41. (= 2012, 広田康生訳「アーバニズムの下位文化理論に向かって」森岡清志編『都市空間と都市コミュニティ』日本評論社, 127-64.)
- , 1984, *The Urban Experience*, 2nd. ed., New York: Harcourt Brace & Jovanovich. (= 1996 松本康・前田尚子訳『都市的体験』未来社.)
- Friedberg, Ann, 1993, *Window Shopping: Cinema and the Postmodern*. University of California Press. (= 2008 井原慶一郎・宗洋・小川朋子訳『ウィンドウ・ショッピング』松柏社)
- Florida, Richard, 2008, *Who's Your City?*, Basic Books (= 2009 井口典夫訳『クリエイティブ都市論』ダイヤモンド社)
- 長谷川一 2014『ディズニーランド化する社会で希望はいかに語りうるか』慶応義塾大学出版会
- 磯村栄一 1968『人間にとって都市とはなにか』NHK 出版
- 影山穂波 2004『都市空間とジェンダー』古今書院
- 菊地夏野 2019『日本のポストフェミニズム』大月書店
- 久保友香 2019『「盛り」の誕生』太田出版
- 松本康 2021『「シカゴ学派」の社会学』有斐閣
- Harvey Molotch, 1976, “The City as a Growth Machine: Toward a Political Economy of Place”, *American Journal of Sociology*, Vol. 82, No. 2 (Sep., 1976), pp. 309-332 (= 2012 堤かなめ訳「成長マシンとしての都市——場所の政治経済学にむけて」町村敬志編『都市社会学セレクション 3 都市の政治経済学』日本評論社)
- 中島直人・社団法人アーバニスト『アーバニスト』ちくま新書
- 中澤高志 2004『東京都心 3 区で働く女性の居住地選択』由井義通・若林芳樹・中澤高志・神谷浩夫編 2004『働く女性の都市空間』古今書院
- 中澤高志 2012『多様化する女性のライフコース』由井義通編 2012『女性就業と生活空間』明石書店
- N H K 放送文化研究所編 2015『現代日本人の意識構造第八版』N H K ブックス
- 大貫恵佳・木村絵里子・田中大介・塚田修一・中西泰子 2023『ガールズ・アーバン・スタディーズ』法律文化社
- Pain, R. 1997, “Social geographies of women’s fear of crime”, *Transactions, Institute of British Geographies* 22: 231-244 (= 1999 吉田容子訳「女性が犯罪に抱く恐怖についての社会地理」『空間・社会・地理思想』4, 109-126)
- Rose, G. 1995, “Distance, surface, elsewhere: a feminist critique of phallogocentric self/knowledge”, *Environment and Planning D: Society and Space*, 13, 761-781. (= 2002 神谷浩夫訳「隔たり、見せかけ、どこか：ファロス中心的な自己／知の空間へのフェミニスト批判」神谷浩夫編監訳『ジェンダーの地理学』古今書院)
- 関村オリエ 2018『都市郊外のジェンダー地理学』古今書院
- 渋谷敦司 1986『都市研究とフェミニズム理論』吉原直樹・岩崎信彦『都市論のフロンティア』有斐閣選書
- 1996『都市空間のジェンダー的構成と女性政策、女性運動』吉原直樹『21 世紀の都市社会学 5 都市空間の構想力』勁草書房
- 清水晶子 2022『フェミニズムってなんですか?』文春新書
- 田中東子 2020『感じのいいフェミニズム?』『現代思想 総特集フェミニズムの現在』vol.48-4 青土社

- 谷口真美 2008「組織におけるダイバシティ・マネジメント」『日本労働研究雑誌』No.574  
角田隆一 2017「防犯カメラ／ケータイカメラ」田中大介編著『ネットワークシティ』北樹出版  
上野千鶴子 1990→2009『家父長制と資本制』岩波現代文庫  
Van den Berg, Marguerite, 2017, *Gender in The Post-Fordist Urban: The Gender Revolution in Planning and Public Policy*, Palgrave Macmillan.  
若林芳樹・木下禮子・矢野桂司・神谷浩夫・由井義通編 2002『シングル女性の都市空間』大明堂  
渡部周子 2007『〈少女〉像の誕生：近代日本における「少女」規範の形成』新泉社  
矢澤澄子編 1993『都市と女性の社会学』サイエンス社  
米澤泉 2014『「女子」の誕生』勁草書房  
吉見俊哉 1987→2008『都市のドラマトゥルギー』河出文庫  
———1996『リアリティランジット』紀伊國屋書店  
由井義通 2004「大都市におけるシングル女性のマンション購入とその背景」『働く女性の都市空間』古今書院  
由井義通 2012「ジェンダーからみた住宅問題」由井義通編 2012『女性就業と生活空間』明石書店  
由井義通編 2012『女性就業と生活空間』明石書店  
由井義通・若林芳樹・中澤高志・神谷浩夫編 2004『働く女性の都市空間』古今書院  
由井義通・若林芳樹・中澤高志・神谷浩夫 2012「働く女性の居住地選択と都市空間」由井義通編 2012『女性就業と生活空間』明石書店

#### 注

- 1) 本論考は、一般・学生向けに編まれた『ガールズ・アーバン・スタディーズ』（大貫ほか編著 2023）の補論として位置付けられている。
- 2) この点において、近年のフェミニズムが「感じのいいフェミニズム」を演じざるをえなくなっているという指摘は重要だろう。田中東子によれば、現代の働く女性たちは「自分自身をファッショナブルで洗練されているように見せ続けるというパフォーマンスを遂行し続けている」（田中 2020：29）。とりわけ「この演劇的で都市的な現代女性の生き方に加担している」（同上）という自覚は、働く女性を担い手とした現代都市の「都心回帰」と関係しているのではないだろうか。
- 3) 本論では、1990年代以降の都市空間で展開しているジェンダー秩序の構造変容を扱っており、「第三波フェミニズム」や「ガールズカルチャー」の延長線にある。ただし、2010年代以降、「#me too」など情報空間で展開され、インターセクショナリティにあらためて焦点が当たった「第四波フェミニズム」と重なる部分もある。その意味で、本論におけるフェミニズムの「波」は、便宜上の区別であり、重層的なものと考えたい。